

Mon Nara



Numéro296 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

JUIN 2021 6 月号

奈良日仏協会・放送大学奈良学習センター公開講座 「ドゴールとその時代（1890-1970）」

8月22日（日）奈良公園バスターミナル・レクチャーホールにて開催
講師 渡辺和行（京都橘大学特任教授）

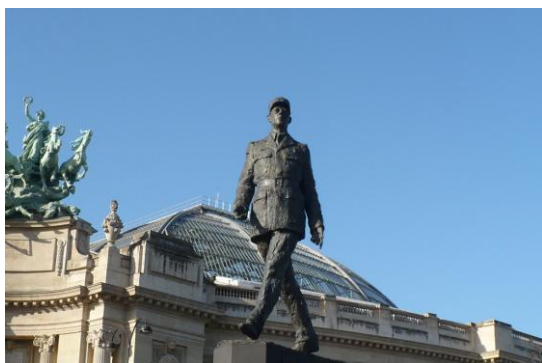
シャルル・ドゴールという名前の建造物・広場・街路は、フランス本土に 3633 あります。もっとも知られているのはシャルル・ドゴール空港でしょう。また、1980 年、1987 年、1999 年にフランスの雑誌『歴史』が行った同一アンケート「フランス史の著名人と 1 時間話すことができるとするなら、あなたは誰を選びますか」で、連続して第 1 位となったのがドゴールでした。

では、ドゴールとは一体誰でしょうか。ドゴールは、戦争の 30 年（1914-44）と繁栄の 30 年（1945-73）を生きた軍人にして政治家です。ドゴールは 1970 年までの事件と大きく関わっています。第一次世界大戦、恐慌下の 1934 年に提唱した機甲師団、第二次世界大戦、自由フランスの戦い、戦後復興、植民地の独立、1958 年のアルジェリア危機、第五共和政の誕生、1960 年代の高度経済成長、1968 年の五月革命などです。これらの事件を通してドゴール自身、軍人ドゴール（1912-39）から英雄ドゴール（1940-44）へ、そして政治家ドゴール（1945-57）から大統領ドゴール（1958-69）へと変貌を遂げていきます。

興味深いエピソードがあります。ドゴールは 1940 年に不従従と反乱を扇動した罪で死刑を宣告されました。このときの国家元首はペタン元帥です。それ以前の両者は、美しい師弟関係を築いていました。それが、第二次大戦で相反する陣営に属することとなり、大戦終了後の 1945 年にペタンは戦犯として死刑を宣告されました。時の政府首班はドゴールです。

このように時代と格闘し、歴史を動かしたドゴールは拒絶の人 (l'homme du refus) でもありました。ドゴールは、ナチス・ドイツ、ペタン（ヴィシー政権）、ヤルタ体制、第四共和政憲法、アルジェリア危機下の將軍フロンド、五月革命、フラン切り下げ、国葬をも拒んでフランスの大地に帰りました。

公開講演では、こうしたドゴールの行動を跡づけつつ、第一次大戦から大統領退陣までの時代を振り返ることで、この時代（1914-70）のフランス史とヨーロッパ史に焦点を当てようと思います。（渡辺和行）



グラン・パレ横のドゴール像



コロムベール村にあるドゴールの墓

日時：2021年8月22日（日）

講演会：14:00～16:00（開場 13:30）

会場：奈良公園バスターミナル・レクチャーホール（収容 300 名の会場、コロナ感染防止対策のため定員 130 名とし、日仏協会枠 65 名を超えた時点で参加申込受付終了）

参加申込先：参加無料、但し要申込 8月16日まで。 メール sugitani@kcn.jp（杉谷）

tel 090-6322-0672（杉谷）

fax 0742-62-1741（三木）

主催：奈良日仏協会、放送大学奈良学習センター ※詳しくは本号同封のチラシをご覧ください。

第56回奈良日仏シネクラブ例会（2/28）『めぐり逢う朝』（1991）

17世紀フランス。ヴィオールというチェロの前身のような古楽器の名手サント=コロンプは、妻を亡くした後、娘二人と屋敷で閉鎖的な生活をして、離れに小屋を造って音楽生活を送っています。娘たちと屋敷でコンサートを開き、その名手ぶりに宮廷音楽家にならないかと誘われますが、演奏を投げ銭で評価されるような世俗的な栄光など欲しくないと断ってしまいます。サント=コロンプがひとり小屋で妻の死を悼んで作曲した「哀悼の墓」を演奏すると亡き妻が姿を現すのですが、この曲をだれにも聴かせることはありません。ある日、靴職人の息子マラン・マレが弟子にして欲しいと願い出ると、お前は「音楽家」ではないと一度は断られますが、娘の取りなしで弟子になります。姉妹は彼と恋仲になりましたが飽きたと棄てられて、さらに妊娠した兄が死産して失意のあまり首吊り自殺をしてしまう理不尽な結果には、許せない怒りの念を覚えました。父親は悲しみの余り半年楽器を演奏しなくなってしまいます。音楽は死者たちの魂を悼むためのものだというのがコロンプの信念で、俳優ジャン=ピエール・マリエールの肖像画のような演技が深く心に残りました。若き日のマラン・マレを演じたギヨーム・ドパルデューは、壮年時代を演じたジェラルド・ドパルデューの実の息子とのこと。なかなかハンサムですが、親子とはいえ冒頭から語り始める壮年のマレとあまりに容貌や雰囲気などがかけ離れていたのが、少し戸惑いました。（山岸多賀子）

フランス・バロック時代についての私の知識は、鍵盤楽器曲をピアノで演奏したことがあるラモーやクーランぐらいで、この映画の主人公であるサント=コロンプという人については、名前さえ知りませんでした。彼は、当時かなり高名なヴィオール奏者であって、6弦だったバス・ヴィオールを7弦にし、足に挟んで演奏する方法を編み出した人であることを、この映画を観る前に聞いた説明で初めて知りました。このことからガンバ（脚）の名が付与されて、ヴィオラ・ダ・ガンバと呼ばれるようになったとか。サント=コロンプには二人の娘がいて、共にヴィオール奏者で、家族3人による演奏会を催していました。物語は、世俗の栄光を求めるマラン・マレ（宮廷音楽家）が、亡き師である孤高の音楽家サント=コロンプの崇高な生き方を回想するシーンから始まります。師との葛藤、師の二人の娘との情愛や軋轢をヴィオール音楽に載せて展開して行きます。マラン・マレはサント=コロンプの粗末な庵に夜な夜な通い続け、その音楽の極意を授かろうとしますが、この場面は、



日本文学「今昔物語」の蟬丸伝説に登場する、源博雅朝臣と琵琶の達人蟬丸を、マラン・マレとサント=コロンプに翻案されています。蟬丸は百人一首にも出てくる平安時代の歌人でもあり、その歌に象徴されるように、俗世を絶ち清貧の中でひたすら道を究めた伝説的な人物で、茶道や華道に通じる侘・寂の美意識の持ち主です。フランスの作家と映画人が、このような極めて日本的な感覚・芸道観を理解し、巧みに、フランス・バロック時代に変容させたことに驚くと同時に楽しみました。フィナーレで「音楽とは・・・」の命題に二人の音楽家がやり取りするところなど、さながら禅問答を見るようでした。

映画って本当に面白い!!（藤村久美子）

「この世のすべての朝は帰ってこない。月日は流れた。Tous les matins du monde sont sans retour. Les années étaient passées.」。サント=コロンプの娘の痛ましい悲劇の直後の語り。この短い言葉に、想像を絶するような人間の悲しみ・痛み・諦念・希望が凝縮されている。原作の小説を読んでも、映画のナレーションを聞いても、感じずにはいられない。人間の感情には、文学・映画・音楽・絵画・演劇・舞踊等の芸術では直接表現できないことがある。ただ想像するしかない。そして間接的にでも感じさせてくれる力が、それらの芸術にはあるのだろうか？あるとするなら芸術は私たちの人生に遠くから光をもたらしてくれているのだろうか？「私は創造者ではない」とインタビューに答える謙虚なアラン・コルノー監督の繊細な感性と構想力。監督に乞われて日本文学を翻案したパスカル・キニャールの魔術のような創作力。たくさんの才能が結集して作られたこの映画には、日頃あまり意識しないことを思わせる力があるようだ。月の照り映える静かな夜、忘れられていた音楽が蘇る。（浅井直子）

第147回 フランス・アラカルト (3/13) : ヴァンデ地方の魅力を語る

昨年新しく奈良日仏協会に入会されたバティスト・レタヨさんをお招きし、3月13日に生駒セイセイビル会議室で、第147回フランス・アラカルトを開催し、会員12名と、一般の方4名が参加しました。パワーポイントで、ヴァンデ県の位置、主要都市、16世紀以降の歴史を解説の後、写真や動画を映しながら、自然の特徴、名物、名勝など、ヴァンデ地方の魅力をたっぷりとお話されました。まず驚いたのは、いちばん高い地点でも298mしかない(山がない)県だということです。レタヨさんは田舎の中の田舎で何もないところと謙遜されていましたが、le Passage du Gois という潮が満ちると海になる道や、la Venise verte という緑に包まれた運河など、自然の美しさもさることながら、赤ワインに蒸留酒を混ぜベリー系の葉や茎を漬けたお酒やコーヒークール、ガーリックパン、鴨、牡蠣など美味しい飲み物食べ物一杯あって、いちどぜひ行ってみたいと思いました。あまり観光客に荒らされていない素朴なフランスの田舎が味わえる気がします。その一方で、le Puy du Fou という3800人の地元ボランティアが参加する大掛かりな近代的スペクタクルショーもあるということで、そちらも気になります。(杉谷健治)





バティスト・レタヨさんご一家が、昨年、学園前の私のお近くに引っ越しして来られました。1歳半になる可愛い坊やと日本人の奥様の三人家族です。私は日課の犬の散歩の時に、お庭のお世話をなさっているバティストさんに偶然出会い、奈良日仏協会を紹介させていただきました。日本語もお上手でとっても気さくな方と、ご近所の評判も上々です。今日はバティストさんが、出身のVendée地方のお話をされるということで、私もアラカルトに出席致しました。フランスの北西部に位置するVendéeは日本ではあまり知られていないですが歴史は古く、お話は宗教戦争にまで遡り、リシュリューやナポレオン1世にもゆかりのある地方だそうです。中央部は緑の多い畑地、牧草地に恵まれ、主に麦、菜種、とうもろこしの栽培が盛んです。沿岸地方の長い浜辺はコートダジュールに次ぐフランス第二の観光地でCôte de Lumière (光海岸)と言われている。また緑のベニスと言われる沼沢地も広がっています。とりわけ1キロ500ユーロもする世界一高いジャガイモの生産地である



ことや、結婚式の時に特産品のブリオッシュのみこしに、花嫁を乗せてみんなでダンスをするなど、ご当地出身の方ならではの会話に、みんな興味を惹かれました。バティストさんの熱のこもったお話に彼の郷土愛も感じて、とってもいい時間を過ごせました。コロナが終わったら行ってみたいになって思いました。(山中陽子)



Merci à toutes celles et ceux qui sont venus le 13 Mars dernier. J'espère que cela vous aura donné envie de visiter la Vendée lors de votre prochain voyage en France ou d'en savoir un peu plus sur cette région malgré mes explications brouillonnes ! Pour celles et ceux qui souhaiteraient approfondir les sujets abordés, je vous conseille les sites et documents suivants :



Sur les lieux à visiter : <https://www.vendee-tourisme.com/>

Sur l'histoire : <https://www.histoiredevendee.com/>

Un joli album photo: <http://www.vjoncheray.fr/-/galleries/phototheque/photo-vendee>

お集まりくださった皆さん、ありがとうございました。私の説明は分かりにくかったと思いますが、次にフランスへご旅行される場合、ヴァンデ地方へ訪れてみたい、もう少しヴァンデのことを知りたいと思っていただけたら嬉しいです。詳しくお知りになりたい方には、次のサイトがお勧めです。日本語のサイト:「フランス革命におけるヴァンデ戦争の歴史的位置」、「ヴァンデ戦争におけるカトリック王党軍の組織: フランス革命期の地方反乱について」、「体感! 世界最大級の野外スペクタクル劇〜フランス ピュー・デュ・フー〜」で検索してみてください。(バティスト・レタヨ Baptiste Retailleau)

「モリエールの喜劇」(8)『守銭奴』(L'Avare, 1668) 山本 邦彦

『アンフィトリオン』に続き『守銭奴』(5 幕散文) もまたプラウトスに想を得た作品です。主人公のアルパゴンはいちで欲張りな町人です。息子クレアントと娘エリーズの結婚相手には、持ち出しがなく遺産がすぐ入ってくるように、それぞれ年配の金持ちの後家と男やもめをあてがうつもりでいます。

クレアントにはすでにマリアヌという恋人がいますが、父親の方も彼女を後妻に迎えるつもりだと知って、卒倒しそうになります。またクレアントが結婚資金を借りるために紹介されて面会した悪徳高利貸しが父だとわかって、大げんかになります。

娘マリアヌにも密かに言い交わした恋人ヴァレールがいますが、アルパゴンは自選の婿を押しつけてきて譲りません。彼女が泣いて懇願しても効き目はありません。なにしろ持参金なしで嫁に出せるのですから。



シャルル・デュラン (アルパゴン)

こうなると、この芝居は父親の食欲と吝嗇が家庭崩壊を招くという深刻な悲劇になるところですが、モリエールはこれにさまざまな笑劇的要素をちりばめて、笑いの多い喜劇に仕立てました。例えばとりもちばばあの方のフロジヌにおだて上げられた時のアルパゴンのえびす顔と金の無心をされたときの渋い顔の交互の繰り返しとか、料理番兼御者のジャック親方が主人の用件毎に一々仕事着を取り替えて話を聞く場面とか、アルパゴンがヴァレールに教えてもらった格言を間違えて「人は食べんがために生きるものにして、生きんがために食べるものにあらず」と言ってしまう場面とか、さながら笑いのネタの宝庫です。そういう大衆性・娯楽性も手伝って今や『タルチュフ』に次ぐ人気作品になっています。

日本では明治期に尾崎紅葉がこの作品の翻案劇『夏小袖』を書き、何度も舞台に乗せました。井上ひさしの『金壺親父恋達引』は文楽版翻案劇です。

熊野古道の「牛」に導かれ

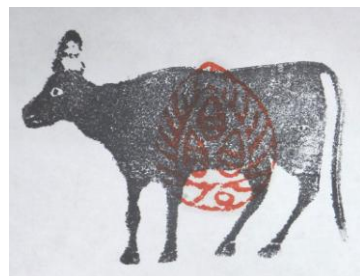
浅井 直子

4 月に熊野本宮大社で開催された画家の赤木睦代さん(会員)の個展「蘇りの地、熊野へ」を見に行ってきました。赤木さんの牛をモチーフにした作品は、これまで Mon Nara 誌上やチラシ、さらにはテレビ出演等で度々目にしていた、なんとなく知っているつもりでしたが、実際に作品と対面するのは初めてでした。5~6 年前、赤木さんの個展に出かけて感銘を受けた当協会前会長の坂本成彦さんから、熱っぽく「赤木さんの展覧会の記事を書いてくれないか?」と依頼されたものの「実際に見てないから無理ですよ」とやりとりしたことが、なつかしく思い出されました。

赤木さんの作品には実際、見る者を惹きつけるオーラがあるような気がします。夢幻的な構図、鮮明かつ精妙な青と赤のヴァリエーション、骨太なタッチ。画像を通じてその「力強さ」は十分に伝わってきますが、実物の絵画とゆっくり向き合っているうちに、「優しさ」あるいは見る者の心に触れてくる「自然さ」が、絵の奥からわき出てくるように感じられました。

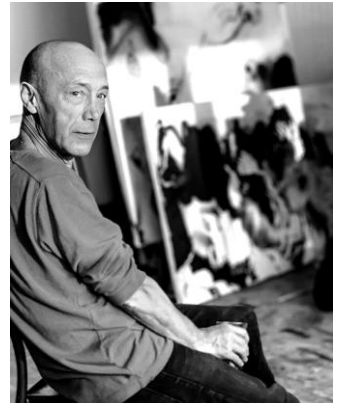
牛は約 1 万年前の新石器時代に家畜化されたといわれ、世界各地で信仰の対象となってきましたが、熊野本宮大社摂社の月見岡神社(右写真)は、江戸時代初期から農耕の神「牛神様」として近隣地域の農家から信仰されていたというお話を、本宮の郷土史研究家の方からお聞きすることができました。この神社は熊野古道の山道の途中にあり、例祭時には牛像符(右図像)が頒布され、昭和 40 年代初めまでは牛と一緒に山に上って参詣する人もいたそうです。神社は立派なヒノキ群に囲まれていて、それらの樹木からも霊気を感じられます。

赤木さんの作品に、幻想的な雰囲気はただよう熊野古道に牛と童子が描かれた「発心」があります。今回この絵を熊野の地で見たことで、赤木さんの独創的なイメージーション世界に刺激されるとともに、往古から熊野古道を行き来してきた人々の姿を少し思い描くことができました。(同個展は 7 月 19 日~25 日京都上賀茂神社客殿にて開催予定)



オリヴィエ・カテ個展 《Contemplations》：生駒にて開催

5月15 - 30日の土曜と日曜、生駒市山崎町のGALLERY IND. (ギャラリー・アイ・エヌ・ディー <https://www.gallery-ind.com/>) にて、ルーアン在住のアーティスト Olivier Catté (オリヴィエ・カテ) さんの個展が開催されました。当協会副会長オリヴィエ・ジャメさんを通じて、ギャラリーのディレクター吉倉拓真さんのご協力のもと、カテさんから奈良日仏協会みなさんにメッセージが寄せられました。



2016年中国に芸術家として滞在した後、私の芸術の仕事は深く揺れ動きました。知性の重圧から解放されて、本質に近いものを味わうに至り、東洋は私に新たな道を開いてくれました。例えば、インクとそのあらゆる方向への分散（多少は抑制できるものの）という予測しがたさの中で仕事をする。画紙の浸透性を用いること。手短かに言うなら、たくさんの造形上の偶然の成行きが、私というものを引き下ろさせて、独自の視点からの幾何学と遠近法にゆだねさせたのです。私の作品は、もはや私を従わせて作品展開上の固有の論理を有することがなくなりました。

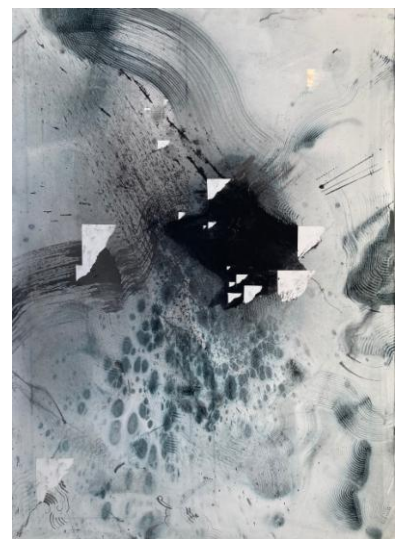
とはいえ、多様な観点が私に動きのきっかけを与えてくれました。ちょうど、散歩するとき視線の向かう先に応じて事物が変化するように。私はその場の空気を表現し、空白と空白の間にあるすきまを具象化します。山、滝、雲、風のそよぎ、楽曲の一節の主題、渦巻、街、焼け焦げた木片の粉、宙に浮かぶ龍、…。

私の絵画は、情動の記憶、すなわち長いあいだ凝視した結果が土台になっています。心残りなのはパンデミックのために、私自身が日本に行き生駒のGALLERY IND.で、この展覧会をみなさんに自分で紹介できなかったことです。また今度ということがあればと思います。

(オリヴィエ・カテ Olivier Catté)



「浮遊する世界の諸相」
(Mondes à la Dérive, 2019)



「栄光の道」
(La Route Glorieuse, 2020)

◆日本の画材を用いた作品を鑑賞していると、いつか訪れた天川村の澄んだ川の水面のゆらぎを見ているような感覚に襲われました。これは私が今まで見てきた抽象画の中でも日本人の心にスッと入ってくるとも洗練された作品です。そして、東洋と西洋のコミュニケーションというテーマがうまく表された作品だと思いました。(泉莊太)

◆梅雨入りの雲が生駒山からおりてきている。駅に近い静かな住宅街、竜田川は上流よりも川幅が狭くそのそばのユニークな設計のカタチの集合住宅の一階ギャラリー。まことに小さな会場に数枚の絵。欧米の現代絵画らしからぬとても静かなモノトーンタッチである。ホームページの「Contemplations」というテーマ説明を読むと、カテさんは、東洋的な思考法について、瞑想とか沈黙思考と言う面から考えているらしい。一枚一枚をじっと見ていたら、黒い矩形の面が、建物のようにも黒い箱のようにも見える。三角や四角の角ある空白が飛んでいる。近づいて下方に目を当てると、細い筆で書いた曲線が幾筋もある。このあたりは線や面のモンタージュとも見える。隣の一枚には、青黒い色で靄のような気配が描き込まれ、要するにカタチの出来かかったもの、その黒っぽい画面をまた四角な白が不連続に飛んでいる。遠近法では無い奥行き…。立体的ではないが、なにかが積み重ねられている。これらが作り上げる空間の不思議なアンバランスに引き込まれた。谷底？ ビル街のすき間？ それにしてもこれは水彩画？ 版画？ シルクスクリーン？ この線は墨流しかな？ すると、一緒に行った息子が「マーブリングみたいやけどなあ」と言いなおして首を傾げた。しかしこれは、岩絵の具による手書きの細い曲線なのであった。このような線やカタチの画面には比喩ではいい表せないメッセージがあるようだ。カテさんの提案通り、心を無に帰して、思い出などをあてはめていたら、なにか非常に静かな気持ちになった。帰り道、曇り空の下で街を流れる竜田川は、細く小さく鈍く光って流れていた。(泉悦子)

十津川の「空中の村」(Le Village dans les Airs) ジョラン・フェレリ

Bonjour, je m'appelle Jolan (prénom) Ferreri (nom de famille). Je suis né dans les alpes Françaises le 8 janvier 1992. Je suis venu au Japon il y a 6 ans ; j'avais 22 ans. Après avoir passé 2 ans à Nishinomiya, préfecture de Hyogo, où je terminais mon master à l'université, j'ai déménagé à Totsukawa, dans la préfecture de Nara. J'ai été embauché pendant 3 ans dans le département forestier de la mairie. Mon travail était principalement de faire de l'abattage (comme un bûcheron !) et des enquêtes sur le terrain. J'ai profité de ces 3 années, pour monter un projet qui me tenait à coeur : Le Village dans les Airs.

Avec une entreprise française, et avec l'accord de la mairie, j'ai construit Le Village dans les Airs en 2019, et l'ai ouvert le 1er Avril 2020. Mais qu'est-ce que c'est ? Pour faire simple c'est un parc en hauteur construit dans une forêt de Totsukawa. Fait de ponts suspendus et de cabanes dans les arbres. Les utilisateurs peuvent prendre un café à la cime des arbres, se reposer dans des filets et faire une "randonnée dans le vide" dans des ponts transparents. Plus qu'une simple aire de jeux, c'est aussi une aire de repos où petits et grands peuvent passer une journée à s'amuser en forêt.

Pourquoi avoir construit Le Village dans les Airs ? Cette idée est née par la prise de conscience de deux problèmes majeurs que j'ai constatés au Japon : Le premier étant que l'industrie forestière subit une crise majeure depuis ces 20 dernières années. Il est important de considérer les forêts, non seulement comme une aire pour la production de bois (fonction économique) mais aussi comme une aire de récréation (fonction sociale). Le deuxième étant que les Japonais n'ont pas pour habitude de s'amuser en forêt. Peut-être parce que tout le monde a oublié comment s'amuser et passer du temps en nature. Je souhaitais enseigner une nouvelle façon de passer du temps en forêt, loin du stress de la ville.

Le parc a été ouvert en avril 2020, en pleine crise du Corona. Ce fut une première année difficile mais je garde espoir que les visites vont augmenter ces prochains mois. Si vous en avez l'occasion venez me rendre visite !

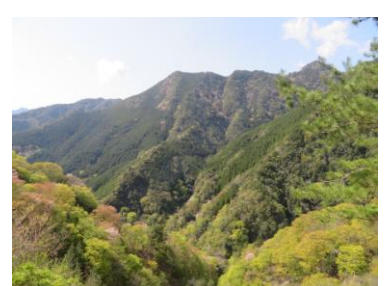
こんにちは、ジョラン (名前)・フェレリ (名字) です。1992 年 1 月 8 日にフランスのアルプス地方で生まれました。6 年前 22 歳で来日し、兵庫県西宮で 2 年間の大学の修士課程を終えた後、奈良県十津川に引っ越してきました。役場の林業部門に 3 年間雇用されました。私の仕事は主に木の伐採 (樵みたい！) と対象地域の調査でした。その 3 年間の経験を活かして、ぜひともやりたいと思った「空中の村」のプロジェクトを立ち上げました。

役場の了解のもとフランスの企業と組んで「空中の村」を建設し、2020 年 4 月 1 日に開園しました。「空中の村」は簡単にいうと、十津川の森の中に造られた高所の公園です。木々の間につり橋や小屋を作りました。利用者は樹木のでっぺんで珈琲を飲んだり、網の上でくつろいだり、下が透けてみえる橋で「空中散策」をすることができます。単なる遊び場というよりは、休息のエリアです。子供も大人も森の中で一日楽しめる場所です。

「空中の村」を作った理由ですが、この構想は私が日本で気づいた二つの大きな問題を意識したことから生まれました。一つ目は、林業はこの 20 年で重大な危機に直面し、森林を樹の生産のためのエリア (経済的機能) としてだけでなく、気晴らしのためのエリア (社会的機能) としても考えることが大切だからです。二つ目は、日本人は森で遊ぶ習慣がないこと。みんな、いかにして自然の中で遊んで時間を過ごすか忘れてしまったのかもしれない。町のストレスから遠く離れた森で、時間を過ごす新しい方法を教えられたらと願っています。

この公園はコロナ危機真只中の 2020 年 4 月にオープンしました。困難な一年目でしたが、次の年には来訪者が増えるという希望を持っています。

みなさま機会がありましたらぜひ私のもとにお越しください！「空中の村」<https://kuuchuu-no-mura.com/>



室生のガレットとクレープのレストラン シルヴァン・シャボール

Bonjour à tous. Depuis un peu plus de deux ans nous accueillons les amateurs de galettes et les curieux qui souhaitent découvrir la fameuse crêpe à base de farine de blé noir autre nom donné au sarrasin. Le restaurant se trouve dans la commune Muro-shimotaguchi de Uda à 5 minutes du temple de Muro-ji, un peu après Ryuketsu jinja. C'est juste en face de Furusato genki mura.

La galette est originaire de Bretagne. C'est un plat populaire qui était typique de ces campagnes. A l'origine comme substitut au pain, son succès s'est étendu au-delà des bocages bretons et a gagné toute la France. Cette simple galette s'est vue enrichie de nombreuses garnitures en fonction des goûts de chacun.

Depuis mon arrivée au Japon j'essaie de transmettre à tous mon amour de la cuisine et de la Bretagne. Je m'attache à respecter au mieux les produits et à mettre à l'honneur les produits japonais. De plus, depuis l'ouverture de notre restaurant je me suis intéressé à la confection du pain en utilisant des méthodes anciennes. Grâce à un four en glaise, la saveur de celui-ci se trouve fortement enrichie. Vous êtes tous les bienvenus à Méli-mélo dans un cadre simple et familial pour découvrir les charmes de cette vie pastorale. (Sylvain Chabrol)

こんにちは、みなさん。2年ほど前から、ガレット好きな人たちやそば粉をベース生地にした有名なクレープのことを知りたいと思っている好奇心旺盛な人たちを、私たちのお店に迎えるようになりました。レストランは室生寺から5分ほど、龍穴神社を過ぎた所にある宇陀市の室生下田口地区にあります。「ふるさと元気村」のちょうど向かいです。

ガレットはブルターニュ生まれで、この地方を代表する庶民的な料理です。もともとは、パンの代用として、その成功はブルターニュの枠を超えてフランス中に広がりました。この素朴なガレットは、各自の好みに応じたたくさんの具によって中味が豊かになっています。

私は日本にやってきた時から、みなさんに料理とブルターニュへの愛着を伝えようと努めています。できるかぎり土地の生産物を尊重して日本の産物を大事にすることにこだわっています。さらに、私たちのレストランを開いてからは、昔の方法を用いてパンを焼くことに興味を持ちました。粘土でできたかまどのおかげで、パンの味はずいぶん風味豊かになりました。田園生活の魅力を発見しに、簡素で家庭的な雰囲気「Méli-Mélo メリメロ」に、みなさまぜひいらしてください。

「Méli-Mélo メリメロ」 <https://brog-melimelo.tumblr.com/>



シャボールさんご夫妻



◆◆のどかな片田舎で、ブルターニュ伝来のガレット、クレープが味わえる店。気さくなシルヴァン、おっとりしているが賢い育ちゃん、それに、おてんば娘の美月と愛らしい弟の爽真。彼らとの付き合いは、近所に暮らす私にとっては楽しみの一つである。その楽しみは、お店を訪れる多くの人達の共通の認識でもあるのだ。そのことは、口コミで広がった店の繁盛ぶりが証明している。ブルターニュ地方の庶民の味を知りたいければ、メリメロを訪れるべし。(竹本寿史)

私の好きなワイン（２）「アルザス」 小寺 順子（こてら じゅんこ）

皆さんはワインと言うと何を思い浮かべられるだろうか。ボルドーの深紅の濃厚な赤ワイン、きりっと冷えたブルゴーニュのシャルドネ、あるいは華やかなシャンパーニュだろうか。勿論この３種はフランスワインの花形である。しかしこれ以外にもヴァル・ド・ロワール、コート・デュ・ローヌ、山岳地帯、地中海沿岸、南西部など魅力的なワインの産地がある（右図）。

その中から今回はアルザスワインを紹介したい。アルザスには日本から旅行で出かける方も少なくないと思う。またワインもリースリングなどは日本でもよく飲まれている。私はそれほど知っているわけではないが、自分が経験した範囲のことを記してみたい。

フランスの山岳地帯にはアルザス＝ロレーヌ、ジュラ、サヴォワの各地方があり、アルザスワインは山岳地帯のワインに属する。私はアルザス地方のコロンバージュの家の写真を見てから、ずっとそれを見たいと憧れていたが、実現したのは 30 歳も過ぎてからだった。アルザスは中心都市ストラスブールからミュールーズまでのヴォージュ山脈沿いの丘陵地に広がり、気候は山岳気候で冬季は冷涼だが初夏から収穫までは温暖である。アルザスワインには 4 つの高級品種「リースリング」「ゲヴェルツトラミネール」「ピノグリ」「ミュスカ」がある。

初めてストラスブールに行った時はまだワインの知識はなく、街のワイン屋で勧められるがままに、一本だけ買って帰った。どんなワインだったかは覚えていない。二度目にアルザスを訪れたときはメスとサルブルで友人宅に泊めてもらいその後ストラスブールに行った。その時あるドメーヌを訪れてワインを試飲し、その価格に驚いた。日本では高額なリースリングとゲヴェルツトラミネールのグランクリュが、半分の値段で売られていたのだ！ 私はその場でゲヴェルツトラミネールを 6 本買って日本に送ってもらった。いま思うと、何故あの時リースリングとヴァンダンジュ・タルディブ（後述）も買わなかったのだろうと悔やまれる。今度行く機会があれば、ゲヴェルツトラミネールだけでなくリースリングもまとめ買いたい。リースリングはドイツにもあるが、これは甘口でフランスのとはかなり違う。

アルザスワインには白の「ピノブラン」「シルヴァネール」「シャスラ」と赤の「ピノノワール」もある。以上が単体で飲めるワインである。ただサンヴァンサン竹中さん（当協会法人会員）によると、「シャスラ」は見かけなくなったということである。それと特殊なワインとして遅摘みの「ヴァンダンジュ・タルディブ」と粒選り摘みの「セレクション・ド・グラン・ノーブル」がある。ヴァンダンジュ・タルディブは凄く甘い、フォワグラとマリアージュすればいいと言われている。ドメーヌとしてはヒューゲルがリーズナブルな値段で有名だが、私自身はなぜか相性がいまひとつ。

いつかワイン畑を見に行つて何処かのドメーヌで試飲したいのだが、そのためには車が必要だ。残念ながら、夫は左ハンドル車は運転出来ないというので、現地のフランス語のツアーに参加するつもりでいる。ストラスブールかコルマルから出発してワイン街道を訪れる。これはマルレンアイムからタン近辺までの南北およそ 170 キロの道のり。その間にワイン造りで有名な村がずらりと並んでいる。リボーヴィーレ、リクヴィール、オー・クニクスブール城を巡る旅である。途中でワインの試飲もあるだろうし買うこともできるだろう。車で好きなところに行けないのは残念だが、ツアーならではの楽しみもあることだろう。早くコロナが収束してフランスに行けるようになる日が待ち遠しい。



河出書房新社『図説フランスワイン紀行』より

ストラスブールのコロンバージュの家
撮影：濱恵介（会員）オー・クニクスブール城
Le Guide Vert : Alsace Lorraine, Michelin

ガスパールに恋をして～フランス語の絵本を求めて 竹下 明江（たけしたあきえ）

それはある春の日。愛犬を9種混合ワクチン接種のために動物病院へ連れて行った折のことだった。待合室で順番を待つ間、ふと受付の足元に置かれたラックの動物雑誌の間から小さな絵本がこちらに向けられているのが目に入った。あれは何だろう。手に取った正方形の絵本は『リサとガスパールのであい』

（文：アン・グットマン 絵：ゲオルグ・ハレンスレーベン ※二人は夫婦）、まさにひとめぼれだった。絵本には珍しい「油絵」のタッチ。犬のような、しかし長い耳はうさぎのような白と黒の動物がごく普通に学校で人間の子供たちと同じ授業を受け、給食をとり、休憩時間には外で遊び喧嘩もする。何とも不思議でコミカルな世界に魅了され、これを原文で読めないだろうかと思案し、帰宅後図書館の蔵書検索をかけ始める。

■『リサとガスパールのであい *Gaspard et Lisa – la rencontre*』

転校生のリサ。自分との類似が許せないガスパールは無視作戦。大喧嘩の後リサの俊足で存在を認める。リサの青のマフラー交換で「マフラーきょうだい」になるがそれはふたりだけのひみつ。愛の始まりは秘密から。「マフラーきょうだい」は原語でどう表記されるのか、その疑問が原文に向かうきっかけとなった。「マフラーきょうだいになった」は「on est devenus frère-et-soeur-d'écharpe」とあった。

マフラーきょうだいの彼らは常に一人称複数形「nous」で強固な絆。ところが、そんな絆が怪しくなるのが『ガスパールこいをする *Gaspard est amoureux*』の巻。ガスパールがリサのライバルの発表会に出かけたところから、リサは大荒れ、彼らの関係は破局寸前となる。その危機こそがガスパールにリサへの愛を初めて意識させ最後には「Je t'aime」とリサに告白。いずれも油彩であり、重厚なタッチが現実感を醸し出しながらも、笑いを誘うストーリーの軽みが全体のバランスを保っている。特筆すべきは絵本のフランス語には手書きの書体が使用されていることで、実際に子どもが鉛筆で書いた日記のような効果を与えている。どの作品もわずか26ページの中に、完璧な起承転結とカメラワークのような画家の手捌きがすばらしい。

このシリーズを足掛かりにフランス語の絵本を求めて図書館から貸出可能なものを借り出し、フランス図書専門店のHPも参照するようになった。サイズも色合いもそして紙質も違う様々な絵本を味わう楽しさ、読み終えたときのささやかな達成感。幼い頃のようにいつのまにか絵本に夢中になっている。

掘り出し物は「マルティヌちゃん」シリーズ。CASTERMAN社のこのシリーズ（文：ジルベール・ドラエイ 絵：マルセル・マルリエ）は現在60冊発行されている。図書館の蔵書数冊は1970年代（邦訳が出版された時代）に購入され半世紀近く経過しているとはいえ色が鮮明で美しい。当時のブルジョワの日常生活にはレトロ感が漂うが日本人が憧れた生活がここにある。

■『マルティヌ バレエを習う *Martine petit rat de l'opéra*』

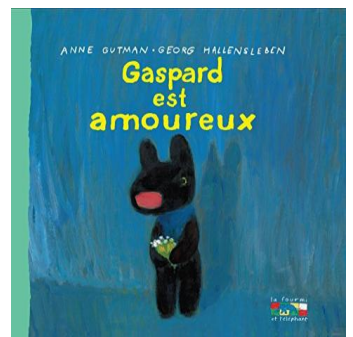
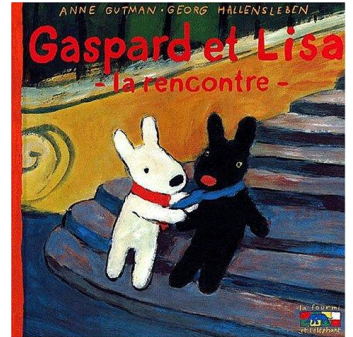
バレエを習うマルティヌちゃん。練習風景がバレエの基本ポーズとともに紹介され、レベルアップしながら最後は発表会、晴れの舞台となる。バレエが取り上げられているものは珍しく何度見ても見飽きることがない。

その他のお薦め作品

■『かえってきた おにんぎょう くまのアーネストおじさん *Ernest et Célestine ont perdu Siméon*』

映画化された人気シリーズの絵本の第1巻が本書である。線がやや荒いが線描は確かで茶色や灰色を基調とした淡い色遣いと優しい「おはなし」が初めての読者にもなじみやすいところに絵本作家ガブリエル・ヴァンサンの魅力があると言えるだろう。

■『青い蓮 *Le Lotus Bleu*』作者エルジェはベルギー人。タンタンの冒険旅行シリーズ（オールカラー版）の第5作。第二次世界大戦前の上海が舞台で列強の横暴、アヘン汚染や国際麻薬組織、満州事変、日本の国際連盟脱退、スパイ活動や秘密工作等が描写される。日本人には「痛い」話であるがタンタンの相棒犬のMilou（邦訳ではスノーウィ）のおとぼけぶりに救われる。



会員投稿

理髪外科医アンブロワーズ・パレ

角田 茂（つのだしげる）

Je le pansai, Dieu le guérit. 私は彼に包帯をした、神が彼を癒し給うた。

アンブロワーズ・パレ（Ambroise Paré, 1510-1590）

フランス革命以前、外科医は理髪外科医（仏：barbier chirurgien, 英：barber surgeon）と呼ばれ、内科医の下僕であった。彼らは内科医の指示があると、創傷の治療、瀉血、浣腸、死体解剖などを請け負って、普段は理髪店を営んでいた。理髪外科医アンブロワーズ・パレ（右画像）は、国王フランソワ1世（1494-1547）の治世下、鉄砲創の治療など軍医としての功績が認められ、プロテスタント教徒（ユグノー）ではあったが、国王の外科医となった。その後、4代の国王、アンリ2世、フランソワ2世、シャルル9世、アンリ3世の侍医となった。外科医が内科医と対等になり、短い白衣ではなく、長い白衣を着ることができるようになったのは、フランス革命後であった。



パレの外科学における最大の貢献は、止血法である。彼はウィリアム・ハーヴィー（1578-1657）による血液循環の発見（1628）以前に、外科手術時における止血の重要性について知っており、銃創治療や四肢切断などの手術時、絹糸を使った結紮止血法と焼きごてを使った焼灼止血法を行っていた。現在行われている顕微鏡下手術時のバイポーラー凝固止血は、この焼灼止血法が起源である。彼の骨折・脱臼に対する治療法の多くは、現在もなお、整形外科領域でいかされている。

パレは敬虔なユグノーで、外科治療の技量のみならず、人間的にも国王から評価され、信頼されていた。ユグノー戦争（1562-1598）の中で起こったサン・バルテルミーの虐殺（1572）の時も、間一髪で助かっている。この虐殺の首謀者は、アンリ2世の死後、絶大な権力を握ったその王妃カトリーヌ・ド・メディシス（メディチ家出身でフランス食文化の確立者）であったが、その息子、国王シャルル9世の特命により、彼は大量殺戮の難を逃れたわけである。冒頭に掲げた「私は彼に包帯をした、神が彼を癒し給うた」は、キリシタン外科医としての信念であり、日本のことわざ「人事を尽くして天命を待つ」に近い意味を持っている。キリスト教的には、「天命を信じて人事を尽くす」の方が、より聖書的かもしれない。

アルザス仏像写真展の思い出

本田 倫子（ほんだ みちこ）

この度、奈良日仏協会に再入会させていただきました。以前会員をしておりましたが、結婚・出産・育児をしているうちに遠のいてしまいました。昨年秋にガイドクラブの皆さんが聖林寺に来られたのをきっかけに、出戻ってまいりました。

日仏協会に在籍しておりました時のことを少し書かせていただきます。2004年のことですので、今から17年も前のことになるのです。その頃私は勤めていた会社（フランスからエステティック用の化粧品を輸入・販売する）を辞め、実家である聖林寺（桜井市）の仕事を手伝っていました。そんな折、日仏協会では、飛鳥園の小川光三社長（当時）の奈良仏像写真展をアルザス地方で開催する準備をしておりまして。時間的に余裕のあった私は、フランスの主催者であるアルザス日本学研究所とのやり取り等を担当し、フランスまで小川氏の同行を（旅費は自分持ちで！）させていただくことになりました。アルザス地方はコルマルとストラスブールの二都市で写真展を行いました。コルマルは「ヨーロッパで最も美しい街」の一つと言われ、ドイツ風の木骨組みの建物が立ち並び、カラフルで可愛いらしい街です。また、ストラスブールでは、ノエル（クリスマス）前のマルシェが出て賑わっていました。仏像写真展も盛況で、聖林寺の十一面観音様も展示の一翼を担っていました。私の中で、とても良い思い出として残っています。

私は今、聖林寺で働いていますが、聖林寺の十一面観音様は、今年の6月22日から9月12日まで、東京国立博物館で「国宝聖林寺十一面観音—三輪山信仰のみほとけ」展にご出座されます。2022年2月5日から3月27日までには奈良国立博物館でも展示の予定です。よろしければ、お運びいただければ幸いです。

また、月に二回程、「なら食と農の魅力創造国際大学校」でフランス語の講師をしています。フレッシュな生徒たちに感化をうけて、趣味でもあるお菓子作りを習いたいと思っています。これから、よろしくお願いいたします。



ストラスブールの奈良仏像写真展にて

フランスらしいリモート会議

林 薫子（はやしかおるこ）

With コロナの日常生活も早 1 年以上、すっかりリモートワークや会議が定着しましたね。最初は映像が固まったり、音が途切れたり、思わず部屋着で登場したり、とトラブルもありましたが、いまやすっかりリモート上級者となったことでしょう。日本ではコロナ禍でリモートワークや会議が急速に日常化しましたが、フランスではコロナ以前から徐々にリモートワークやリモート会議が浸透していました。というのも、フランスではたびたび大規模な交通ストがあり、そのたびに都市の交通網が麻痺し、通勤に数時間もかけるくらいならば自宅からリモートで仕事をした方が効率的ということで企業等は仕事のデジタル化、リモート化を推進しました。

そんななか私がこれまで体験したフランス人との個性的なリモート会議をご紹介します。

1. リモート会議の背景に自分の趣味やインテリアを披露。

日本人ならばシンプルな壁をうつすとか、ヴァーチャル背景を使ったりして、なるべくリアルな生活空間を披露したくないものですが、フランス人にとってリモート会議の背景は自分の趣味やセンスを披露する絶好の機会。例えば真っ赤な壁に現代アートのコレクションとか、世界中から集めた植物（盆栽等）を並べるとか。オフィスでは想像できない趣味の世界を披露され、はっきりいって仕事の話には集中できませんでした。

2. バカンス先からのリモート会議参加。

場所は南仏プロヴァンス、プールつき別荘のプールサイドの parasol の下、BGM はパシャパシャと水の音と子供の声、「ごめんなさい。子供が遊んでいるからうるさいでしょ?? ちょっと静かにしなさい、ママは日本と会議なの」当然こちらは仕事をする気力はなくなりましたが、フランスの先進的な働き方を実感しました。その当時はリモート会議って優雅、と思っておりましたが、すっかり日常の風景になりましたね。引き続きヴァーチャルとリアルのハイブリッドを楽しんで生活していきましょう。



リモートではなく早くリアルな旅を。
ということでパリのマルシェ。

コロナ禍によるオンライン化の利点

各務 奈緒子（かがみなおこ）

昨年 2 月からのコロナ禍により、「オンライン化」が時の言葉となりました。私の担当する大学の授業もオンラインとなりました。はじめは戸惑いばかりでしたが、対面ができない分、より丁寧な授業、緊密な連絡や理解を促すような課題の提出など、授業実施に際して大変真剣に取り組んだ一年となりました。

一方オンライン化により、プールの国際学会やカリブ海のフランス語作家マリーズ・コンデのセミナーのような、興味はあるもののハードルが高くて気の引けてしまうようなシンポジウムに、簡単に視聴参加できるようになりました。また、今年 3 月 13 日から開催された「フランコフォニー月間」の多くの催しもオンラインとなりました。たとえば映画『アンリ、アンリ Henri, Henri』、『クエシパン〜私たちの時代 Kuessipan』、ケベックのサーカスカンパニー「FLIP Fabrique」によるショー「Blizzard」、アトリエ「フランス語の授業でのバンド・デシネの利用について」、バンド・デシネ「La Bombe（原爆）」に関するウェビナー、フランス人女性シンガー POMME（ポム）のミニライブ

(<https://www.youtube.com/watch?v=5BV9-SH1DRY>) などです。今後も様々なフランス語圏関連のオンライン開催行事がありそうです。

ただし、あれこれ参加視聴しようとして、スケジュールに追われてしまうことにもなります。参加したいシンポジウムを同日にいくつも予約してしまったり、研究会の別室を二台のパソコンから同時視聴したこともありました。また、これまでは欠席の際にも「遠方なので」、あるいは「予定がつかません」などと、不参加の理由を述べることもできましたが、自宅から視聴となると、それが言いづらくなったとも感じています。

この一年、交流や留学も、オンラインにより大学の授業の一環として行われ、より簡単に実施できるようになりました。今後はオンラインが一つの形となっていくのかもしれませんが。



新緑の香落溪：名張川支流の青蓮寺川上流にある柱状節理の岩壁が続く溪谷です。休日に家族で出かけました。

第 57 回奈良日仏協会シネクラブ例会 (7/25)『グレースと公爵』(L'anglaise et le duc, 2001)

- ❖ 日時：2021 年 7 月 25 日 (日) 13:30~17:00
- ❖ 会場：奈良市西部公民館 5 階視聴覚室 (予定)
- ❖ プログラム：『グレースと公爵』(2001 年, 115 分)
- ❖ 監督：エリック・ロメール Eric Rohmer
- ❖ 参加費：会員 100 円、一般 300 円
- ❖ 問合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300 (浅井)
- ❖ 舞台はフランス革命期パリ。主人公は実在の英国人女性グレース・エリオット。監督エリック・ロメールは自ら脚本を書くことが多いが、本作品ではグレースの回想録を翻案。外国人で王党派だった彼女の個人的視点からのフランス革命は、歴史の教科書に見られる民衆側からの革命像とは少し異なる。ロメールはまた、自然光を活かしたロケーション撮影で知られるが、本作品は絵画作品をもとにコンピューター・グラフィックを駆使し、フランス革命時代のパリを再現。様々な試みを重ねて映画の可能性をおし広げてきたロメールの若々しい精神が、この作品でも遺憾なく発揮されている。物語はグレース (ルーシー・ラッセル) がサロンでオルレアン公 (ジャン=クロード・ドレフュス) をもてなす場面から始まる。あでやかでおちつきある色使いが画面全体にゆきわたる。かつて恋人同士だった二人だが、今は友人としてつきあう。グレースは王党派でオルレアン公は革命派。二人は政治的立場を異にするが相手への敬愛は失わない。オルレアン公との関係もさることながら、敵方の逃亡者を自らのベッドの脇に置くグレースの毅然とした立ち居振る舞いに、ロメールが探求し続けた「友愛」のテーマの片鱗が垣間見られる。

**第 148 回フランス・アラカルト (10/9)「アルザス、仏独の狭間に輝く特異な地域 (仮題)」**

- ❖ 日時：10 月 9 日 (土) 15:00~16:30
- ❖ 会場：生駒市セイセイビル 4 階 401 会議室
- ❖ 講師：濱恵介さん (会員)
- ❖ Mon Nara 通信 8 月号に案内掲載
- ❖ フランス東部のアルザスは歴史的にドイツとの縁が深く、その地誌と独特な文化について語ります。(濱恵介)

《2021 年度第 2 回理事会報告》.....事務局 日時：2021 年 5 月 20 日 (木) 15:00~16:15。
 場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、喜多、藺田、中辻、藤村、杉谷。議題 1. 2021 年度会員数・会費納入：95 件中納入 61。議題 2. 3/18 理事会後の活動：(5/15) 第 4 回美術クラブ例会、兵庫県下に緊急事態宣言発令を考慮して中止。議題 3. 今後の行事：(7/25) 第 57 回日仏シネクラブ例会『グレースと公爵』エリック・ロメール監督、(8/22) 放送大学との共催公開講演会「ドゴールとその時代」講師渡辺和行、(10/9) 第 148 回フランス・アラカルト「アルザス地方について (仮題)」講師濱恵介。議題 4. Mon Nara。議題 5. その他：今年度のガイドクラブは中止、奈良日仏協会 30 周年記念行事の検討、次回理事会 7 月 15 日 (木) 15:00~16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆アヤメ科アヤメ属の植物に「イチハツ (一八、一初、鳶尾草)」があることを昨年知りました。姿形はカキツバタやアヤメによく似ていて俳句の季語にもなっていました。かつて防火・防風のために藁屋根の上に植える風習があったそうで、「一八の屋根ならびたる小村かな」(子規)、「一八の家根をまはれば清水かな」(漱石)の句は、おそらくそんな風景を描いたものなのでしょう。☆昨年、マリー・アントワネットが好んだ庭園ブチトリアノンで撮影した写真を整理していると、庭師の小屋の屋根の上に咲いているアイリス (iris) が目にとまりました。調べてみると、ノルマンディー地方にも屋根にアイリスを植える風習の村があり、さらには日本には「イチハツ」があって、フランスと同じような風習があったことを知ったのです。カキツバタやイチハツの仏訳に用いられる iris には、世界中に様々な品種があるようです。☆日本とフランス、農村と王妃の庭園。隔たっていると思われるものに類似が見つかって不思議な気がしました。もしコロナ禍がなかったら、この春は屋根にアイリスの花咲く家が並ぶノルマンディーの村に旅していたかもしれません。しかしながら当分は、厳しい現実が続くそうです。いまは庭に咲く花々に癒されつつ、時空を超えた旅の夢を楽しんでいます。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2021 年 10 月号は **9 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行)又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行)に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2021 年 6 月号 numéro296

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司